

作：風兒 不弑王



自動翻譯機

『自動翻訳機』

「こんな物しかないけど、いいかな」

私は、ポットのカモミールティーをカップに注いだ後、戸棚から見つけ出したクッキーを皿に取り出した。

「いえ、どうかおかまいなく、宇治原さん」

その宇宙人は、ごく流暢な日本語で答える。

そう。

私は今、宇宙人と自宅でお茶をしているのだ。

スウェールと名乗ったその宇宙人は、見た目は日本人と変わらない。ごく普通の二十代の青年そのものだ。

強いてその顔の特徴を挙げるならば、目は細く切れ長の一重瞼、黒目勝ちなところが神秘的で印象に残る。鼻は鼻腔が小さめでやや低く、鼻筋が細い。唇の形は薄く、やや横に大きい。

体型は高く細い。背丈は180センチメートルくらいで、体重は50キログラム半ば有るかどうかだろう。

服装はと言うと、これがごく普通の紺色のスーツ姿。サラリーマンそのものだ。その為、玄関の呼び鈴を鳴らした彼を、私は取引先の営業マンと勘違いして、すんなりと家に上がらせてしまったのだった。

ソファに腰掛けるよう勧めたところで、私は自分の勘違いにようやく気付いた。

彼が、自分が宇宙人である事を説明し始めたからだ。しかしながら私は、更なる勘違いをしてしまった。てっきり彼が新興宗教か何かの勧誘であろうと思い込み、無理矢理追い返そうとしたのだった。

彼を玄関の外まで押し出したその時、庭の見慣れぬ大きな銀の物体に目を奪われた。

UFOだった。

スウェールが口を開く。

「すみません。こんな夜に急にお邪魔した上、このような気を使わせてしまって」

「いや、別に構わんよ。丁度、怖がりの家内も出かけているし。ただ、あれには多少驚いたけどね」

私は、窓から見える中型トラック程の大きさのU F Oに視線を移した。

我が家自慢の芝生の庭には、最も世間に知られているアダムスキー型U F Oが、そのどっかりと鎮座している姿を三日月に照らし出されていた。

「せっかくの青々とした芝生に降りてしまって、すみません。でも、心配なさらないで下さい。U F Oが降りた後の植物は生命のパワーがみなぎりますので」

スウェールは穏やかな笑顔と声で応える。

「芝刈りが大変になるな……」

私は、無断で庭に着陸された事に対し多少の抗議のイヤミを込め、意地悪くつぶやいた。

案の定、スウェールは苦笑いをして頭を下げた。最初の印象通り、どうやら悪い奴ではなさそうだ。

「それはそうと、いったい私に何の用だね？ 私は科学者でもなければ、熱狂的なU F O信者でもない。どちらかと言うとU F O否定論者だったんだけど……」

事実、この期に及んでも、私は目の前の出来事を信じきれないでいた。

「実は私、自動翻訳機の改良担当の技師なんですが、更なる改良の為にサンプリングを行いたいと思ひまして、あなたの所にお邪魔したわけです」

まるで若手セールスマンの営業廻りのように見える。名刺でも差し出しそうな感じだ。

「自動翻訳機？ サンプリング？ 私はおたくの製品は使っていないと思うがね」

自動翻訳機なんて買った覚えはない。ましてや、宇宙人が作った製品なんて。

「いえいえ。そういう意味ではなくて……。ええと、つまりコレなんですけど……」

そう言うと彼は、自分の左耳の後ろを私に向けた。

「見えますか？ ここに5ミリ大の黒子が有りますよね？コレが自動翻訳機です」

確かに5ミリ大の黒子が有るには有るが、どう見ても私にはただの黒子にしか見えない。

「コレを取り外してしまうと……」

プチッ、という小さい音と共にその黒子が外された。黒子の内側には無数の繊毛が生え、かすかに光を放っている。黒子を外された部分は少し赤く、皮膚が擦り剥けた様になっている。

「▲☉≡△# <φ∩┘\$☆ㄣ※▽？」

彼の言葉は、いきなり早送りされたテープレコーダーの音の様になって、何を言ってるのかさっぱり分からなくなってしまった。

私が口を開けたままポカンとしていると、彼は黒子を再度装着し直した。

「と、まあ、こんな具合の製品なんですが」

スウェールは少し乱れた黒髪を胸ポケットから出した櫛で整え、私の顔を再び覗き込む。

「あ……、ああ。なかなか素晴らしい……、黒子だな」

私は動揺の為、とんちんかんな返事をしてしまった。

「そうですね？ 本当に黒子にしか見えませんか？ コレ最新型なんです！ 一つ前の型は、黒子の直径が1センチ程も有りましたから、だいぶ小型化されたんですよ。性能もかなり良くなったんです」

まるで地球人の営業のセールスマンのように、彼は熱く語る。

「ふーん、なるほど。それで、その素晴らしい自動翻訳機が、この私とどういう関係が有るのかな？」

「方言なんです」

「は？ 方言？」

「はい。方言です。一つの国内でも地方により様々な方言が有り、イントネーションも含めると、非常に多くのバリエーションが必要となるのです」

「ふむ」

「例えば使用者が大阪で活動する場合、大阪で生まれ育ったという偽の履歴を作るのですが、当然大阪弁も話せなければならなくなるわけで、自動翻訳機も大阪弁モードに設定されるわけです」

「なるほど」

「沖縄なら沖縄の言葉が、九州なら九州の言葉が、東北なら東北の言葉が、それぞれに必要なわけで、自動翻訳機でごく自然な会話を実現するには、膨大な量のサンプルが必要となるのです」

「それは、大変そうだな」

「大変です。サンプルを集めるには、それだけ数をこなさなければならないのですが、いかにせん、昨今の言葉の乱れにより、純粋な方言のサンプルの収集が難しくなっているのです」

「言葉の乱れの皺寄せが、こんなところにも有ったのか」

「それで、宇治原さん。生粋の江戸っ子の貴方から東京弁のサンプルを頂きたく、こうやって訪ねて来た訳です」

「サンプルを取るって言ったって、いったいどうやって？ 変な事はしないだろうな？ あやしい手術とか」

「ははは……、宇治原さん、テレビの変なUFO番組を真に受けしないで下さいよ。このスキャナーで脳を一瞬スキャンするだけです。2、3秒で終わりますよ」

いつの間にかスウェールは、ハンディタイプのバーコードリーダーの様な物を手にしていた。

「そう……。でも、確かに私は正真正銘の江戸っ子だが、東京弁をどの程度知っているか自信は無いよ」

「大丈夫です。調査済みですから」

「調査済み？ いつの間に……。まったく油断も隙も有ったもんじゃないな、プライバシーの侵害だよ」

「宇治原さん、まあ、そう怒らないで下さいよ。我々宇宙人とのコミュニケーションの役に立つのですから、地球人にとっても結構有益な事なんですよ」

「随分、勝手な言い草だな。ま、いいや。で、何か見返りは有るのかな？ 製品の改良になるという事は、君たちの儲けにつながるという事なのだろう？」

「確かに、その通りです。では、どうでしょう？ 見返りとして貴方を完全な健康体にして差し上げるというのは。このスキャナーは身体の全てをスキャンして異常を発見してくれます。そして発見した異常をその場で完全に治療する事も出来るのです」

「ほほう。なんとも、ドラえもんの道具並みに安直な医療器具だな」

もう私は半ばヤケになりつつあった。あまりにも非現実的過ぎて、開き直りというか、もうどうにでもなれというのが正直な気持ちだった。

「それとも、一年程の宇宙旅行でもしてみますか？ 戻って来た時には地球上では百年過ぎてしまってますが」

「おいおい！ それじゃ浦島太郎だろう！ そんなのはゴメンだよ」

「それでは、健康体になるという事でよろしいですね」

「ああ、そうしてくれ」

特に健康になりたいとか望んでいた訳でもなかったが、タダで私の頭をスキャンされるのも癪だったので、試すだけ試してみる事にした。

「では、ソファの背もたれに寄りかかり、力を抜いてリラックスして下さい。目は閉じていても開いていても、どちらでも結構です。痛みも何も感じませんから安心して」

スウェールはスキャナーを右手に構えるとスイッチを入れた。

スキャナー先端の読み取り部と思われる小窓が、音も無く青く光り輝きだす。まるでLEDの光の様に眩しい。

私の左耳の辺りから始まり、時計回りに頭を一周スキャンする。左半分はもう一度スキャンされた。おそらく脳の左側に言語野が有るせいなんだろう。

彼が言った通り、3秒程で終わった。

「サンプリングは以上です。では、健康診断に移りますか」

スウェールは例によって、あの穏やかな笑顔と声で、私の顔を覗き込む。

「こちらのロングソファに横になって頂けますか？」

言われた通りにロングソファに仰向けになる。

「では、深呼吸してリラックスして下さい」

スウェールが再びスキャナーのスイッチを操作すると、今度は細く青い光の筋が二本、左右交互に走査し始め、私の身体を頭先从から足のつま先まで隈無く舐めた。

すると今度は、スキャナーから僅かながら低い振動音が響き出し、赤い光線を放ち始めた。

再度、私の頭先从からつま先に向かい走査が始まる。が、今度は所々で一瞬真っ赤なストロボがたかれる。

その度に視界が赤く染まり、走査された部位に微かな熱を感じる。

ものの3分と経たないうちに、全てが終了した。

スウェールは、スキャナーのディスプレイらしき物を見ながら説明を始める。

「宇治原さん。まず、スキャンの結果を申し上げます。脳に関して、隠れ脳梗塞が3カ所見つかりました。次に心臓ですが、狭心症の原因になる、冠動脈へのプラーク付着が見つかりました。肺は、タバコのタールの影響で、かなり癌の危険度が上がっていました。肝臓は、脂肪肝から肝硬変になりかけていました。あとは、軽い十二指腸の潰瘍が二つ、大腸のポリープ六個、内二つが前癌段階、下肢の静脈瘤、軽度の高血圧、高脂血症、高コレステロール、歯槽膿漏、軽い糖尿、ごく小さい腎臓結石が一つ、腰部ヘルニア、前立腺肥大症、軽度のインポテンツ、痔瘻、水虫。以上の問題が有りました」

聞いているだけで気が滅入り、具合が悪くなって来そうだ。

「脳梗塞?! 狭心症?! 癌?! 結石にインポ?! ううーむ、そんなに!? 我ながら成人病勢揃いという感じだな……。若い頃の不摂生のせいかな?」

きっと私は青ざめていたのであろう。スウェールがすかさず穏やかな笑顔と声でフォローを入れる。

「でも、ご安心下さい、宇治原さん。もうすでに全て完治していますから」

「えっ?! 本当に?」

「ええ。先ほどの赤い光によって、全て完治しています」

「おい。治すのも断り無しかよっ！」

身体の問題が全て解決したのはいいが、いまひとつ納得がいかない。もっとも、元に戻せ  
と言う気は毛頭ないが。

「では、宇治原さん。私はこれで失礼します。ありがとうございました。貴方の協力によって、  
自動翻訳機のさらなる改良が進む事でしょう」

「ああ。ご苦労さん」

私はスウェールをU F Oの前まで見送った。

U F Oの、何も継ぎ目のない滑らかな筐体に入り口が浮き出し、手前に開く。その内側はタラップになっていて、自発的に白く輝いている。

別れを告げ、タラップを登り始めたスウェールに私は問いかけた。

「君たちは、いったい地球で何をしているんだい？」

「保護ですよ。地球人が我々の仲間入り出来るようになるまで、天変地異や戦争などの人災によって滅びないようにね」

「君のような宇宙人が、我々の世界にどれくらい入り込んでいるのかね？」

「かなり……、ですね。どこの国の大臣の中にも、必ず二、三人は居ますし、議会の五分の一くらいはそうでしょう」

「そんなに……、入り込んでいるのか」

「意外と貴方の周りにも、何人か居るかもしれませんよ」

相変わらずの穏やかな笑みを浮かべ、スウェールは応える。

「では、宇治原さん。ごきげんよう」

スウェールは会釈をするとU F Oに乗り込み、タラップが上がり始める。

「スウェールっ！ 我々は……、地球人は、はたして君たちの仲間になれるのかね？」

スウェールは振り返ったが応えはせず、例の穏やかな笑みを残したまま、銀の筐体の中に消えて行った。

着陸ギアが白く輝きだし、かすかな唸りを発し始める。

思わず数歩後ずさると、その銀の筐体はゆっくりと浮かび上がり、更に光を増した。

やがてゆっくりと回転を始めると、屋根の上まで達したところで眩い光と共に、一瞬にして空の彼方へと飛び去り、星の一つになってしまった。

私はひとり、スウェールが去って行った夜空を、しばらく見上げていた。

「東京でも、意外に星は見えるものなんだな」

都心とは違い、都下ではまだ星が幾分見える事に今更ながら気付いた。

芝生に横たわり、星座の世界に身を任せる。

いつもは気にもかけなかった夜空を見上げてみると、まるで逆に自分が宙に浮いて、星達を見下ろしているような感覚になってくる。

「大きいな……、宇宙は」

思わず、言葉がこぼれる。



車のエンジンの音が近づいて来る。聞き覚えの有るエンジン音だ。妻が帰って来た。私は半身を起こすと、そのまま妻の車庫入れを見守った。

「おかえり」

私が声をかけると妻は怪訝そうな顔をする。

「あら？ どうなさいましたの？ そんなところで」

「いや。ちょっと星を見たくなってね」

妻は荷物を家の中に置くと、微笑みながら私の左側にそっと腰を下ろした。

「珍しいわね」

「ああ。そう言えば恋人時代以来だな、こうやって二人、星を見上げるのは」

「うふふ。そうね」

そう言うとき妻は、頭を私の左肩にもたれさせる。

微かな香水の香りが鼻をくすぐる。久々の同窓会でめかし込んで行ったのだろう。髪をアップにして、赤珊瑚のイヤリングを付けた上品な大人の女性がそこに居た。

左手で肩を抱くと、私は今日の出来事を、スウェールの事を話そうかどうか迷った。

きっと、からかっていると思われるのがオチだろうな……。

迷いながら、右手で妻の髪を愛撫する。

アップにまとめられた髪。

うなじ。

耳。

！？

黒子！？

まさか……、な。

私は軽く爪の先で、その黒子を引っかいてみる。

「イタっ！」

妻の口から言葉が漏れる。

「あっ！ ごめんごめん！」

私は謝りながらもホッとしていた。

まさかそんな事が有るわけないよな。やはり、もうスウェールの事は忘れよう。

「疲れただろう？ そろそろ家に入ろうか」

「ええ」

ポットにお湯を湧かす。

「お茶、飲むかい？」

「あら？ お茶入れて下さるの？ うれしいわ」

妻が寝室で着替えながら応える。

「ええと、いつものカモミールティーでいいかな？」

「ええ。カモ…ミ…# &…ル…4Ψ ⊂∇÷▲Ю…！！」

「！！！」

二、三日ぎこちない日々が続いた。

しかし、結果的に私たちの愛情は変わる事はなかった。

今日は、我が家自慢の芝生の庭でガーデンパーティーだ。

ゲストは妻の同窓生達。お酒も入り、すでにかなり盛り上がっているようだ。

「★≠μbl%？」

「\$ ㄥ ≤ § ※ Δ @ ʻ」

「ЮЖβ■♪EET+¶。☆☆！☆☆！」

「●∂∃U∩？」

「☆☆！」

「♪♪○▽♀ℝ¥33！」

自動翻訳機を使わない方が、話が盛り上がるんだとか。

スウェール、改良の余地有りだよ。